

第164回簿記検定試験

1級 出題の意図・講評

[商業簿記]

(出題の意図)

今回の商業簿記では、決算整理前試算表から損益計算書と貸借対照表（主要項目のみ）を作成する総合問題を出題しました。

基本的には、必要な決算整理仕訳（未処理事項に関する仕訳を含む）を行うことができれば、解答できる形式です。収益認識に関する論点は、最も重要な論点の一つとして繰り返し出題しています。今回は、典型的な返品権付販売、インプット法に基づく収益認識、受注損失引当金などを取り上げて出題しています。現在の収益認識会計基準では、将来の見積りに基づいた会計処理が取り入れられていますが、事後的な修正も不可避免的に生じますので、最終的な顛末まで含めて理解しておくことが必要です。

有形固定資産および無形固定資産の減価償却は、個々の処理は難しくないと思いますが、時間的な制約の中で正確に処理することは必ずしも容易ではなかったと思います。確実かつ丁寧に処理していくことを心がけてください。

(講評)

損益計算書と貸借対照表を作成する総合問題を出題したので、当期純利益や繰越利益剰余金などを含めて正確に解答することは非常に困難であったと思われます。特に、最終段階において税効果会計を適用することから、残念ながら高得点に至った答案は多くありませんでした。総じて、問題文を読み込んで、いったいどのような取引が行われているのか、正確に理解するという、実務的に重要な問題認識能力も必要であったかと思います。

一方で、簡単な決算整理仕訳を行えば算出できる項目も少なくなく、ある程度の得点をするにはそれほど難しくはなかったと思われます。

今後とも、理論的・実務的に重要な学習項目については、繰り返し出題していきます。合格レベルに達するためには、幅広い領域に関する網羅的な学習とともに重点領域に関する深い学習とのバランスが必要となると思います。決して容易なことではありませんが、このような1級合格のための学習を通じて、簿記・会計に関する知識と問題解決能力は格段に向上すると思いますので、益々の研鑽に励まれるよう希望します。

[会計学]

(出題の意図)

第1問では、用語の意味や会計処理方法の理解を問うことで、会計学の理論や制度を理解していく上で必要となる基礎的知識が備わっているかを確認する設問です。難易度はそれほど高くありませんが、いずれの設問も単純な暗記に頼ったのでは正確な解答を導き出す

ことが容易ではなく、それぞれの処理が要求される根拠にまで遡って理解しておく必要のあるものに限定して出題しました。

第2問では、連結財務諸表と包括利益計算書の作成プロセスを通じて、連結会計や包括利益の本質的理解を問う問題を出題しました。従来と出題のスタイルが若干異なるので戸惑った受験者もいたかもしれません。また、包括利益の論点も絡むので、やや計算力が必要であったり、難易度の高い設問もありました。ただ、複数の企業が一つの会計単位になるということの意味が理解されていれば、比較的簡単に解答を導き出すことのできる設問も織り交ぜてあります。やみくもに連結の処理を進めるのではなく、まずは全体像を見渡して設問で問われているエッセンスを掴んでから、解答の戦略を立てて解答に取り組むことが結局は近道になります。

(講評)

第1問は、これまで何度か出題している形式の問題で、文中から誤った記述部分を抽出し、正しい記述へと訂正させることで制度や理論の理解を問うタイプの設問でした。第2問が比較的ボリュームがあり、それなりの難易度の計算問題でしたので、かなり平易な論点に絞って出題したため、正答率は高かったようです。ただし、満点の割合は期待していたほどではなかったため、まだ曖昧な理解の水準に留まっている受験者が多かったのかもしれませんが。基本的な論点とはいえ、回答として要求されるのは専門用語ですので、正確な理解が不可欠です。また、毎回のことですが、誤字や脱字といったケアレス・ミスで失点している答案が今回も目立ちました。普段の練習で誤字等のチェックを疎かにして、本番で正解することはほとんどありません。日々の学習時からの心がけが重要です。

第2問では、2期間の連結財務諸表と包括利益計算書の作成に絡む設問でしたので、これらに関する正確な理解が必要であることは言うまでもありませんが、各設問のうちから、容易に回答できる設問と、それなりの計算力と労力が必要となる設問とを見極めることができたかどうか、明暗を分ける結果となったようです。

問1は初年度の連結財務諸表における金額を問うものでしたので、親会社株主に係る包括利益以外は、まずまずの正解率でした。ただ、問2については2年目の金額について問う設問であったため、連結や包括利益の本質が理解できていたかどうかで、正解率に差が出てきたのではないかと推測します。会計学を修得する上では、解答の段取りが身につくまで練習を繰り返すことも重要ですが、問題の全体像と意図を見極めた上で戦略的に取り組むことも重要です。

[工業簿記]

(出題の意図)

第1問は、工業簿記における実績把握に関係する基本事項でありながら、ともすると盲点になりがちな部分の出題です。原価計算でよくでてくる原価計算票や材料カードがどうい

う補助簿となるのかといった関係をきちんと把握しておく必要があります。「原価計算基準」では実際消費量の計算との関係で継続記録法と、棚卸計算法があげられています。実際消費量の把握との関係で継続記録法と棚卸計算法を理解する必要があります。またわが国の実務として段取時間が直接作業時間になり、直接労務費になるということも知っていてほしいことです。米国では段取工がいて段取費が製造間接費になるのが一般的です。ABCが例として段取費をあげて配賦方法の改良を説明される場合が多いですが、もともと直接費として処理しているわが国ではその説明はあてはまりません。

第2問は全部原価計算と直接原価計算の利益の差がなぜ生じるかを理解してもらう設問でした。棚卸資産の金額、売上原価の金額、利益の金額の相互関係性を問うという趣旨で工業簿記の問題として出題しました。固定費調整の公式にたよって最終的な計算結果を計算できればよいとするのではなく、その理由を理解してほしいと思います。そのしくみを説明する文章を完成させる問題で、正答を誘導する形になっているので、理解が不十分だったひともこの問題をきっかけに知識を整理して理解を深めてもらえればいいと思います。

(講評)

第1問は全問正解のひとは少なかったです。全問正解者は1割程度で、6割程度が1問ないし2問は間違えています。基礎的な問題でありながら意外と盲点になる論点だったことが影響していると思います。

第1問に比べると第2問の出来は良かったです。第2問の問1と問2の両方とも正解したひとは6割程度いました。

第2問の問3は正答を誘導するように作問しており、ヒントもたくさんはっていました。十分に時間もあつたはずなので、落ち着いて文章を読めば全問正解できたと思います。全部原価計算と直接原価計算の違いについて理解が不十分であっても、正答でき、かつこの問題を解くことを通じて理解を完全にすることができればよいと思ってこのような出題形式にしました。しかし、問3を全問できたひとは4割強にとどまっています。問3を全問正解できなかったひとは、全部原価計算方式の損益計算について本質的に理解ができていなかったのだと思います。

[原価計算]

(出題の意図)

第1問は、戦略の策定と遂行のための原価計算からの出題です。①～③では品質原価計算の理解度を問うています。品質保証活動費ないし製品品質保証費とは具体的にどのようなものか。予防原価、評価減か、内部失敗原価および外部失敗原価にはどのような原価要素が含まれるかを理解しましょう。ライフサイクル・コストは、製品やシステムなどの核開発から廃棄処分されるまでの生涯にわたって発生するコストです。研究開発、生産・構築、運用・支援、廃棄などの各段階でどのような原価が発生するのか、それらの関係はどうなっ

ているかなどについて理解しましょう。

第2問は、総合原価計算からの出題です。問1～問2では、正常仕損費および異常仕損費の計算と処理の理解度を中心に問いました。問3ではこれに加えて、総合原価計算における典型的な論点として、完成品と月末仕掛品への原価の配分として先入先出法の理解を問うています。異常仕損費の処理がわからない受験生には難しい問でした。問4は製品の払出単価として平均法の理解を問いました。問3ができていないと解答が難しい問でした。

(講評)

第1問は内容が正しい文章がいくつあるかが明示されていないので、難しく感じた受験者が少なくなかったようです。品質原価計算とライフサイクル・コストの基本を正しく理解していないと、このタイプの出題方法の場合、正答につながりません。戦略の策定と遂行のための原価計算について、しっかり学習を進めましょう。

第2問は、計算自体は注や文章題の指示にしたがえば、解答が比較的容易な計算問題と記述式の問題でした。総じて、出来は予想を下回りました。異常仕損費の処理を理解していない受験生が多かったようです。何が製品原価を構成するのか、正常仕損費と異常仕損費の計算と処理、完成品と月末仕掛品への原価の按分、製品の払出単価の計算など、基本的な論点についてしっかり学習をしてください。